



# 乳児向けの演劇（「ベビードラマ」） 幸せな家族のためのもう一つの政策

Jackie E. Chang ジャッキーE.チャン

（神経心理学者、特別児童専門ドラマセラピスト、演出家、俳優）

Global Agewatch 2015 によると、高齢化指数でスイスが世界 1 位であるのに対し、日本は 8 位となっています。1 位から 10 位の中で、アジアの国は日本だけで、その他はヨーロッパ諸国で占められています。日本では、全人口に対する 14 歳以下の人口が 1970 年代は 24.0% でしたが、2015 年には 12.6% まで落ち込み、2050 年には 9.7% まで減少すると予測されています。65 歳以上の人口（38.8%）は、14 歳以下の 4 倍以上となる計算です。（Almanac of data on Japanese children 2017. P.35）2016 年の日本の出産数は 100 万件に届いていませんが、そのうち鳥取県、徳島県、高知県において 0～4 歳児の人口が最も少なく、東京都の約 1/17、神奈川県は 1/12 となっています（p.42）。

1970 年代と比べると、現在では乳児を見る機会があまりありません。長い時間乳児を見たり（第三者として観察したり）、親密な関係を乳児と持つことはとても珍しいことになってしまっています。そこで、よりデータを集めることで、より賢明な対応策が得られるはずですが、つまり、より知識をつけるということです。乳児の虐待は一般によく知られていませんが、もっとも賢明ではない行為の一つで、大人自身の誤解や子供の誤解によって引き起こされます。児童相談所に寄せられた電話は 2000 年には 1 万件以下であったのに対し、2016 年には 12 万件へと跳ね上がっています（東京新聞、2017 年 8 月 17 日付）。児童虐待の発生数より、出産数が少ないのです。また、増加量も目を見張るものがあります。

「何をしたいのかわからない、自分は完璧な母親／父親ではない」と思い込んでしまうストレスは、すぐにうつと結びつきます。「誰も自分のことを理解してくれない、誰も助けてくれない、この赤ちゃんは私を困らせようとしている（韓国と米国の親の自白より）」と思い込んでしまうのです。子育ては簡単なことではありません。世界的にも 3 歳以下の子供の子育ての責任はより女性にかかっています。ここに、母親がどれだけ肉体的かつ具体的な難問に直面しているかを示す英国の母親のデータがあります。母親の 3/4 が、母親であることは予想していたよりずっと難しかったと答えています。一般的に、年中無休で子供の面倒を見るということが難しいところですが、上位に挙げられるのが；

1. 夜に眠れない／睡眠不足
2. かんしゃく
3. 忍耐強くいること
4. 家事に加えての育児
5. 正しい食べ物を子供に食べさせること
6. トイレのしつけ
7. 兄弟げんか
8. 子供を預けるやりくり
9. 甘やかさずに子供の望むことをしてあげること
10. 子供に正しく歯を磨かせること
11. 子供が病気にかかった時の看病
12. 初めて子供を残して出かけること
13. 夜を通して赤ちゃんを寝かしつけること
14. 赤ちゃん／子どもを夜に眠らせること
15. 常に心配したり、過保護になったりしないこと

（TOP 50 CHALLENGES FACED BY PARENTS（母親の意見））2012 年 8 月 29 日付

小さな乳児を知るためには、情報が必要です。乳児の好きなものだけでなく、他人が乳児に対してどのような反応をするのかということも知る必要があります。乳児の母親がお互いに話すことができれば、そのような情報は自然に得られます。まさにそのことこそ、乳児のための演劇を見た後に、「自分を疑い混乱した、初めて母親になった人たち」と私が体験したことです。母親と赤ちゃんが同じコンテンツ（演劇）を見ることで、母親は自分の赤ちゃんがそれを見ている時のリアクションを観察し、自分が思っていたことと違うリアクションであることを認識します。

「自分の赤ちゃんが笑って反応すると、赤ちゃんもコミュニケーションの取れる人間なんだと感じました。今自分が感じているのは何なのか分からないけれど、初めての赤ちゃんでも育てていけるという自信が湧いてきました。また、自分の周りにいる他のお母さんたちを見ていると、自分は一人じゃない、自分だけが愚かなのではないと感じました。演劇を見てとても元気づけられました。」

「和」は、日本のとても大事な考え方です。赤ちゃんも両親や周りの人たちから、「和」の体験をする必要があります。早いと越したことはありません。赤ちゃんは、集まって体験を共有する機会を持つ必要があります。神経心理学的に言えば「感覚と知覚」の共有です。乳児向けの演劇は、家ではなかなか起こらない実験的な環境を十分に提供することができます；1) 色々な人たち（他の赤ちゃんやその親たちを含む）の身体的な動き 2) 演劇という芸術を通じた様々な感覚と知覚 3) 一緒にいる、一緒に反応するという体験、です。母親たちが一緒に笑ったり、「おお！」と声をあげたりすると、赤ちゃんは自分の母親の方を見て「二人で」「一緒に」笑うのです。

フランスでは 1870 年代から家族のための政策があります。スイス、ドイツ、スカンジナビア諸国は「男女平等主義」の国々ですが、出生率の減少スピードは日本よりずっと速いです。家族支援政策は、ライフスタイルが大きく変わる早い段階を狙う必要があります。なぜならそれは、未知の課題をたくさんもたらすからです。親業は大変ですし、慣れないことでもあります。「子育ての未知の体験」という非常に特化した共通の話題を通して、親は社会的時間を過ごす必要があります。しかし、それが罪の意識や親としての自信喪失を招いてはいけません。3 歳以下を対象にした乳幼児のための演劇は、親たちにとって落ち込まずに体験を共有できるいい機会です。なぜなら、集まる目的が「親業」そのものではないからです。そして親たちもアートの雰囲気の中でよりリラックスできます。今こそ、家族のための政策がアーティスティックでもいい時なのです！